

小輪性ユリ新品種「きたきらり」の育成

大宮 知^{*1} 玉掛 秀人^{*2} 筒井佐喜雄^{*3}
 菊地 治己^{*2} 生方 雅男^{*1} 布目 暁洋^{*4}

ユリ「きたきらり」は胚培養を利用してチョウセンヒメユリの小輪性を導入した新タイプのアジアティックハイブリッド品種である。1994年に北海道立中央農業試験場において、黄色い花色のアジアティックハイブリッドの代表的な品種である「モナ」に花蕾が小さく生育の早い野生種チョウセンヒメユリを交配し、2001年から「L i - 9」の系統名で各種試験を実施した。2003年に優良品種に認定され、品種登録の出願が受理された。花色は鮮橙色で花径が約9 cmと小さく、花形や葉形および花房の形状にも優れ、近年需要が増大しているホームユースでの利用も期待される。「モナ」に比べると葉枯病がやや発生しやすいもののチョウセンヒメユリより少なく、冷凍貯蔵球を利用した栽培も可能である。また1球あたり約4本の採花ができることから収量性が高く、球根の肥大性にも優れている。

I 緒 言

北海道におけるユリの切花栽培は約83haで1,000万本が生産され、10年間で約10倍（面積比）にまで増加し、生産額約16億円の主要な切花品目となった²⁾。この背景には輸入球根の入手が容易になったことや凍結貯蔵球の利用による開花調節が可能となり抑制作型が普及したこと、比較的容易な技術で計画的に栽培できることなどがあげられる。その一方で、大輪・豪華な草姿を有するオリエンタル系品種の生産偏重傾向が著しく進行し、流通側からはバランスを欠いた現状への指摘とともに、近年の切花単価低迷や嗜好の多様化に対応した豊富な品種構成や独自性のある新品種が望まれている。また消費面では、業務需要に加えて近年普及が進んでいるホームユースにおいてもユリは人気のある品目であるが、一般家庭では花蕾や草姿が大きすぎて利用場面が限られる等の意見もあり、フラワーアレンジメントなどに使いやすい小輪品種が求められている。

小輪系のユリとしては野生種のヒメユリ (*Lilium concolor*) があるが、種苗の入手や栽培が難しいこと、

不快臭を有することなどから、限られた地域での栽培にとどまり一般的に利用されるに至っていない。また、通常の交配では雑種の獲得が困難であったことから、品種の育成にもほとんど関与してこなかった⁶⁾。しかし、胚培養などの組織培養技術の利用によってLAハイブリッドと呼ばれる遠縁種間交雑による品種群が誕生し、組織培養を利用した様々な種間交配が試みられるようになり、ユリの小輪化を目指してヒメユリ等を用いた育種も行われてきている。高知県の「ゆうこの輝き」「ゆうこのときめき」や富山県の姫華シリーズなど、いくつかの品種が胚培養によって育成されており、独自生産による有利販売を目指して普及への検討が進められている。

道立農業試験場においては中央農業試験場が1992年度から本格的に種間雑種の作出を開始し、6年間に約7,000花の交配を行い約7,500個の雑種個体を獲得した。それらを花・野菜技術センターにおいて個体調査を行い、小輪系統などの種間雑種個体を選抜して特性調査や生産力検定試験を実施してきた。「きたきらり」はその中の1つであり、小輪性や収量性などの点で有望性が認められたため、新品種として登録された。

花き生産の広まりによって今後国内外の産地間競争はますます激しい状況にある。そうした中でユリは本道の花き生産の主要な品目であることから一層の産地強化が重要である。本道は国内有数のユリ球根生産地であることから、現在の体系化された種苗生産技術を積極的に活用し、オリジナル品種によって他府県産地との差別化を図ることが可能である。本道の地域性を生かし、ユリ産地として区別性を有する新品種の開発が期待されている。

2004年7月8日受理

*1 北海道立 花・野菜技術センター, 073-0026 滝川市
E-mail:tomomy@agri.pref.hokkaido.jp

*2 北海道立中央農業試験場, 069-1395 夕張郡長沼町

*3 同上 (現:北海道立植物遺伝資源センター, 073-0013 滝川市)

*4 同上 (現:北海道後志支庁中後志地区農業改良普及センター, 044-0083 虻田郡倶知安町)

Ⅱ 育種目標と育成経過

「きたきらり」は胚培養技術を利用した小輪性を有するアジアティック系切花用品種の育成を目標として、北海道立中央農業試験場で1994年に花色や草姿の優れたアジアティック系品種「モナ」を種子親として、花蕾が小さく生育の早い野生種チョウセンヒメユリ (*Lilium concolor* ver. *pulchellum*) を花粉親として交配・育成された(表1, 図1)。この交配組合せは通常の交配では種子の獲得が困難であることから、花柱切断受粉法による交配と胚培養技術を用いて雑種を獲得した。培養した46個の胚から正常に生育し鉢上げに至った16個体を、1996年から北海道立 花・野菜技術センター圃場に定植・養成し、個体調査を実施した。1999年に花色・花形に優れ、小輪性や収量に優良品が認められた1個体を選抜し

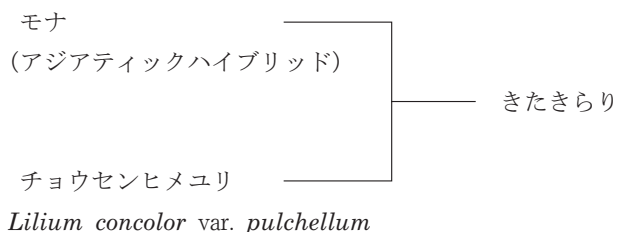


図1 「きたきらり」の系譜

表1 育成経過

年次	試験名	供試系統数	選抜系統数	個体・系統名	実施場所
1994年	交配・胚培養	培養数46	生育数16	9 4 A A 9 6	中央農業試験場
1995年	鉢上げ・個体養成	16個体		9 4 A A 9 6 - 4	花・野菜技術センター
1996年	個体養成	16			
1997年	定植	16			
1998年	開花・個体養成	16			
1999年	一次選抜・増殖	16	1		
2000年	球根養成	1	1		
2001年	生産力検定試験	1	1	L i - 9	
2002年	生産力検定試験	1	1		

表2 生育の概要

品種・種名	年次	定植期	出蕾期	開花始め* ¹	開花期* ²	到花日数* ³
きたきらり	2001	5月17日	6月25日	7月20日	7月23日	64
	2002	5月21日	6月29日	7月26日	7月29日	66
	平均	5月19日	6月27日	7月23日	7月26日	65
モナ	2001	5月17日	6月23日	7月23日	7月26日	67
	2002	5月21日	6月26日	7月29日	8月1日	69
	平均	5月19日	6月25日	7月26日	7月29日	68
チョウセンヒメユリ	2001	5月17日	6月18日	7月13日	7月17日	57
	2002	5月21日	6月21日	7月17日	7月24日	57
	平均	5月19日	6月20日	7月15日	7月21日	57

球周12~14cmの試験区の数値とした。

*¹ 開花始め：開花株が株数の10%に達した日。

*² 開花期：開花株が株数の50%に達した日。

*³ 到花日数：定植期から開花始めまでの日数。

て種苗の増殖を行い、2001年から「L i - 9」の系統名を付して生産力検定試験を実施した。また、生産力検定試験圃場において求評会を実施し、外部評価を行った。

Ⅲ 特性概要

1. 生育特性

(1) 早晩性

冷凍貯蔵球を用いた5月定植栽培での到花日数は約65日であり、アジアティック系品種「モナ」より約3日早く、野生種チョウセンヒメユリより約8日遅い(表2)。

(2) 草姿等

草丈は「モナ」やチョウセンヒメユリより短い、切花としては十分な長さである(表3)。葉枯病の発生がやや認められ、「モナ」よりやや発生しやすく、チョウセンヒメユリより発生が少ない(表5)。

2. 切花特性

(1) 花容

花色は花卉基部・地色とも鮮橙色で、花卉基部に微小な暗灰赤色の斑点を有する(表4, 写真1)。斑点は「モナ」より多いがチョウセンヒメユリより少なく、目立つものではない。花形はスカシユリ型で、花径は約90mmである。「モナ」より明らかに小さく、チョウセンヒメユリよりやや大きい(表3)。香りはほとんどなくチョウセンヒメユリのような不快臭は持たない。

(2) 花房

花房の形は総状で第1花梗の向きは垂直より約40度の斜め上向き、花梗の長さは4.2～4.7cmである（写真2）。花向きは垂直より約10度のほぼ上向きで、箱詰めにも適したコンパクトな花房形状である。球周12～14cmの球根での平均的な花蕾数は1花茎あたり3.0～4.6個で、「モナ」やチョウセンヒメユリより少ない（表3）。

(3) 茎葉

草丈は78～81cmで「モナ」やチョウセンヒメユリより短い、茎長は62～66cmで「モナ」より長く、花房と茎長のバランスが良い（表3）。葉形は葉幅10.4～11.7mm、葉長6.5～9.0cmの披針形で、「モナ」より小さくチョウセンヒメユリより幅広である。弱い光沢を有する。

表3 切花品質と花茎数

品種・種名 (球周 ^{*1})	年次	草丈 (cm)	茎長 (cm)	茎径 (mm)	花径 (mm)	花蕾 数 (個/本)	花梗 長 (cm)	葉幅 (mm)	葉長 (cm)	花茎 数 (本/球)	障害 株率 ^{*2} (%)	異常 株率 ^{*3} (%)
きたきらり ^{*4} (14-16)	2001	79.6	62.3	4.4	94	4.1	3.8	10.7	9.0	3.9	0	0
	2002	85.4	67.8	4.7	86	5.9	5.2	11.9	6.8	4.1	0	4.2
	平均	82.5	65.1	4.6	90	5.0	4.5	11.3	7.9	4.0	0	2.1
	(12-14)	2001	77.6	61.6	4.2	96	3.0	4.2	10.4	3.9	0	0
		2002	81.4	66.0	4.2	85	4.6	4.7	11.7	4.0	0	2.0
		平均	79.5	63.8	4.2	91	3.8	4.5	11.1	4.0	0	1.0
	(10-12)	2001	65.7	53.3	3.4	93	2.1	3.8	10.6	4.1	0	0
		2002	74.9	61.6	3.8	85	3.7	4.3	11.7	4.1	0	4.4
		平均	70.3	57.5	3.6	89	2.7	4.1	11.2	4.1	0	2.2
モナ (12-14)	2001	84.5	58.8	6.0	164	5.5	8.3	14.5	10.0	1.0	0	0
	2002	86.5	63.0	6.0	162	6.3	8.0	15.0	10.8	1.0	5.0	0
	平均	85.5	60.9	6.0	163	5.9	8.2	14.8	10.4	1.0	2.5	0
チョウセンヒメユリ (12-14)	2001	97.0	80.3	5.2	75	6.7	5.2	10.3	9.2	1.0	40.0	0
	2002	122.6	95.5	5.6	77	10.0	5.6	8.6	11.7	1.0	50.0	0
	平均	109.8	87.9	5.4	76	8.4	5.4	9.5	10.5	1.0	45.0	0
	(10-12)	2001	81.8	70.0	4.7	72	6.8	4.2	8.6	1.0	10.0	0
	(8-10)	2001	83.9	72.0	4.2	72	4.3	4.4	8.2	1.0	30.0	0

^{*1} 球周：14-16は球周14cm以上16cm未満の球根を表す（以下同様）

^{*2} 障害株率：不発芽・花とびによる採花不能な株の割合。

^{*3} 異常株率：極多茎による不着蕾で採花不能な株の割合。

^{*4} きたきらりは各株1本の花茎を調査した。

表4 花色の特性

品種・種名	花 弁 色			蕾色	斑点色
	基部	地色	裏面		
きたきらり	鮮橙 (1306)	鮮橙 (1306)	鮮橙 (1306)	明橙 (1305)	暗灰赤 (0420)
モナ	明緑黄 (2705)	明緑黄 (2704)	浅緑黄 (2703)	明緑黄 (2704)	暗紫赤 (9710)
チョウセンヒメユリ	明赤橙 (1005)	明赤橙 (1005)	明赤橙 (1005)	鮮橙 (1306)	赤茶 (0715)

() 内はJHSカラーチャート番号。

表5 その他の特性

品種・種名	年次	内花被			外花被			葉枯病 発生程度 ^{*2}
		幅 (mm)	長さ (cm)	斑点数 ^{*1}	幅 (mm)	長さ (cm)	斑点数	
きたきらり	2001	27	5.6	49	20	5.6	20	少
	2002	23	5.4	35	18	5.4	15	少
	平均	25	5.5	42	19	5.5	18	少
モナ	2001	46	9.3	1	36	9.6	0	微
	2002	47	9.5	2	36	9.7	0	微
	平均	47	9.4	2	36	9.7	0	微
チョウセンヒメユリ	2001	18	4.2	42	13	4.2	33	中
	2002	19	4.5	61	14	4.7	32	中
	平均	19	4.4	52	14	4.5	33	中

球周12-14の試験区の数値とした。

^{*1} 斑点数：花被1枚あたりの斑点数。

^{*2} 葉枯病発生程度：無-微-少-中-多（観察による評価）。

3. 収量性（採花本数）

1個の球根から約4本の花茎が伸長する多芽性を有するため、単位面積あたりの採花本数が「モナ」やチョウセンヒメユリより明らかに多い（表6、表7、写真3）。床面積1aあたり（4,444球）の規格内（花蕾数3個以上）採花本数は、球周10～12cm球で8,709本、同12～14cm球で14,302本、同14～16cm球では14,959本となり、「モナ」の4,221本やチョウセンヒメユリの2,222本を大幅に上回る（表8）。球周10～12cm球は花蕾数3～4個の花茎が多く規格外率も高くなるため収量性はやや劣るが、球周が大きくなるに従って花蕾数5個以上の花茎が増加し、収量性が高くなる。

4. 日持ち性

室温20℃・16時間日長・相対湿度80%条件での1花蕾の観賞日数は4.6日で「モナ」よりやや短い。第1花蕾開花から第5花蕾開花までの日数は5.8日で「モナ」と比べて開花の進行がやや緩やかである（表9）。花蕾数5個の花茎の観賞日数は10.7日で、「モナ」と同程度である。

5. 増殖性

りん片挿しでは1.5gのりん片1枚から2.5個の子球を形成し、チョウセンヒメユリより多く増殖性は高い（表10）。平均一年球重は約1.8gでチョウセンヒメユリより小さいが、養成栽培後の二年球の肥大倍率が高く、平均重・平均球周ともチョウセンヒメユリや「プラトー」、「ベアトリクス」などのアジアティック系品種を上回る。分球性が強く、切花栽培用の二年養成球は多芽球となる。二年養成球において、切花栽培に実用的な球周12cm以上球の占める割合は79.3%、また同14cm以上球の割合は50%である。

IV 求評会における評価

2001年7月25日および2002年7月24日に生産力検定試験圃場において求評会を実施し、アンケートによる意見・感想を聴取した。表11の評価項目について「特に良い・良い（高い）」「悪い（低い）」「どちらともいえない」の中から回答してもらい、その他の意見等は任意に記入す

表6 「きたきらり」における一球あたり花茎数の分布割合（%）

球周 (cm)	2001年						2002年					
	2本	3本	4本	5本	多茎 ^{*1}	異常 ^{*2}	2本	3本	4本	5本	多茎	異常
14-16	0.0	57.1	21.4	14.3	7.1	0.0	0.0	33.3	45.8	12.5	4.2	4.2
12-14	0.0	40.0	40.0	10.0	10.0	0.0	4.0	36.0	34.0	14.0	10.0	2.0
10-12	7.1	14.3	35.7	35.7	7.1	0.0	4.4	35.6	26.7	13.3	15.6	4.4

^{*1} 多茎：花茎6本以上（異常株を除く） ^{*2} 異常：極多茎による不着蕾で出荷不能な株。

表7 切花の規格別採花割合（2002年）

品種・種名	球周 (cm)	調査 本数	切花規格（%）			
			3-4輪（3輪率）	5-6輪	7輪以上	規格外 ^{*1}
きたきらり	14-16	98	21.4 (42.9)	38.8	25.5	14.3
	12-14	195	53.3 (48.1)	26.7	2.1	17.9
	10-12	178	36.5 (55.4)	12.9	0.6	50.0
モナ	12-14	19	10.5 (0.0)	42.1	47.4	0.0
チョウセンヒメユリ	12-14	15	13.3 (0.0)	26.7	60.0	0.0

^{*1} 規格外：0-2輪（以下同様）。

表8 単位面積あたりの規格別採花本数の試算（2002年）

品種・種名	球周 (cm)	採花 率 ^{*1}	花茎 数	採花本数 ^{*2} (本/a)	規格別採花本数（本/a）			
					3-4輪	5-6輪	7輪以上	規格外
きたきらり	14-16	95.8	4.1	17455	3735	6773	4451	2496
	12-14	98.0	4.0	17420	9285	4651	366	3118
	10-12	95.6	4.1	17418	6358	2247	104	8709
モナ	12-14	95.0	1.0	4221	443	1777	2001	0
チョウセンヒメユリ	12-14	50.0	1.0	2222	296	593	1333	0

^{*1} 採花率：障害株と異常株を除いた割合（%）。

^{*2} 栽植密度：4444球/a。

表9 日持ち性試験の結果（2002年）

品種名	供試 本数	1花蕾 観賞日数	5花蕾 開花日数	5花蕾 観賞日数
きたきらり	9	4.6	5.8	10.7
モナ	2	5.4	5.5	11.0

単位：日

表10 りん片挿しによる増殖と養成試験の結果

系統名 種名 品種名	花色	一年増殖養成試験* ¹			二年養成試験* ²				
		りん片 平均重 (g)	一年球 平均数 (球/片)	平均重 (g)	平均球重 定植時 (g)	養成後 (g)	肥大 倍率	平均* ³ 球周 (cm)	大球* ⁴ 占有率 (%)
きたきらり	橙系	1.5	2.5	1.8	2.7	33.3	12.3	13.7	79.3
チョウセンヒメユリ	橙系	1.4	1.3	3.6	3.8	23.3	6.1	12.1	46.4
プラトー	橙系	1.4	1.8	2.7	2.7	21.3	7.9	(10.8)	31.0
ベアトリクス	橙系	1.0	1.7	3.8	3.8	15.3	4.0	(10.6)	10.6
アラスカ	白系	1.6	0.9	3.5	3.5	17.1	4.9	(9.7)	20.5
ビバルディ	桃系	2.7	1.2	3.5	3.5	15.3	4.4	(11.1)	9.5

*¹ 一年増殖養成試験：2000年開始～2001年調査*² 二年養成試験：2001年開始～2002年調査*³ 平均球周：() 内は球周6 cm未満の小球を除いた数値*⁴ 大球：球周12cm以上球表11 「きたきらり」のアンケートによる評価*¹

項目	評価	2001年	2002年
花色・花形	良い	66.7	78.6
	悪い	0.0	7.1
	どちらともいえない	33.3	14.3
全体の草姿	良い	58.3	78.6
	悪い	4.2	0.0
	どちらともいえない	37.5	21.4
新奇性	高い	58.3	50.0
	低い	0.0	0.0
	どちらともいえない	41.7	50.0
使いやすさ	良い	—	50.0
	悪い	—	0.0
	どちらともいえない	—	50.0
総合評価	特に良い	4.2	7.1
	良い	50.0	42.9
	悪い	4.2	7.1
	どちらともいえない	41.6	42.9

単位：%

*¹ パネラーはユリの生産者、流通（市場、小売り）関係者、農協、育種関係者（民間、市町）、農業改良普及センター担当者などで、2001年は25名、2002年は16名。

るものとした。参加者はユリ生産農家、流通（市場・仲卸・小売り）関係者、育種関係者（民間・市町）のほか、種苗販売業、農協、農業改良普及センターなどの担当者である。参加人数は2001年が25名、2002年が16名であった。

特に比較品種は設けていないが、花蕾の小ささや花形（花卉反転が少ない等）・花房の形状など、草姿のコンパクト性についての評価が高く、十分な新奇性を有する評価が得られた（表11）。使いやすさについては「良い」とする評価とともに、フラワーアレンジメントなどのホームユースにちょうど良いという意見が得られ、小輪化による利用場面の拡大が期待された（写真4）。茎の硬さや葉の形などの一般的な品質については良いとする評価の一方で、花色がやや濃いことや斑点を有すること、葉枯病の発生程度などを懸念する意見もあったが、先述し

た評価を否定するものではなかった。さらに、種苗の入手・栽培が難しいヒメユリに対するニーズにも応えられることなどの提言が得られ、ユリの小輪品種の普及が期待された。

V 栽培適地および栽培上の注意

全道のユリ栽培（施設栽培）地域に適応する。また、本品種の栽培では次の点に留意する必要がある。①凍結貯蔵球を利用した5月定植作型での成績であり、長期抑制および促成作型については未検討である。②アジアティック系品種としては葉枯病がやや発生しやすいので、発生動向に注意し適切な防除を行う。

V 論 議

アジアティック系品種は日本のエゾスカシユリ、イワユリと欧州原産の *Lilium bulbiferum* や中国原産の *L. davidii*、オニユリなどとの交雑で育成され、改良されてきた品種群である^{4, 7)}。小輪のマツバユリやヒメユリもアジアティック系品種の交配親の一つであるが、桃色のマツバユリが白色花や桃色花の新花色品種の育成に重要な役割を果たしたのに対して、ヒメユリは交配親に用いられた例は非常に少ない⁶⁾。これは当時、新たな花色や花径の大型化が育種の目標になっていたと思われることやアジアティック系品種とヒメユリの交配では稔実種子を得にくいことが原因と思われる。しかし胚培養などの生物工学的手法を利用して様々な種間交配が試みられるようになり、平田・國重¹⁾がアジアティック系品種とヒメユリを交配した雑種の特性について報告している。その報告では花色や花径・草姿の点で両親の中間的な特徴であることから、大型のヒメユリ、あるいは小型のスカシユリとして新たな切花用途が拓けるものと評価されている。その後、公立の研究機関で胚培養を用いた品種育成が試みられ、同様の組み合わせによる小輪品種を育成している。花の色や大きさは様々であり、富山県は姫

華シリーズとして黄・橙・赤・白色や覆輪タイプなど、花径約9～12cmの小～中輪品種を育成している。また高知県では「モナ」と自県の育成品種であるヒメユリ「スタービューティー」とを交配して小輪品種を育成している。鮮橙色の品種としては前者の「姫華サン」、後者の「ゆうこのときめき」などがあげられるが、いずれも11cm以上の花径を有することから、「きたきらり」は比較的小さい花の品種といえる。

小泉³⁾は小輪品種の特徴として小球開花性をあげており、様々なコストの削減が期待できるとしている。小輪品種は従来のアジアティック系品種より小さな球根で切花生産を行えるため、球根コストの低減や球根生産年数が短縮されたり、密植栽培によって施設を有効に利用できるからである。しかし、この点について「きたきらり」は他の小輪品種と異なる性質を持っている。「きたきらり」は球根の大きさにかかわらず1球から約4本の花茎が伸長する多芽性を有しており、同一の球根サイズで比較した場合、花茎1本あたりの花蕾数は「モナ」や他のアジアティック系品種より少ない。球周10～12cmサイズのやや小さい球根では2輪以下の規格外が多く発生してしまうため、本品種では一般的なアジアティック系品種同様、球周12～14cm或いは同14～16cmの球根を利用することによって3輪以上の規格内の花茎の割合が増え、出荷本数も大きく増加する。栽植密度についての検討は行っていないが、本試験のように条間・株間各15cm程度の栽植密度で栽培することにより、定植球数を増やすことなく採花本数が増加し、多収品種といえることができる。また球根生産においても、一年球から二年球への肥大性に優れるため、従来のアジアティック系品種同様、りん片挿しから2年で球周12～16cm球に仕上げるのが十分可能である。「きたきらり」は球根生産においては省力的とはならないが、切花の収量性において従来の小輪品種にない優位性を持っている。小輪品種は切花の高単価を期待することは困難と考えられ、小球開花性や多収性などは今後の品種育成において重要な特性であると思われる。

岡田ら⁵⁾は小輪品種がヒメユリに比べて葉やけを起こしにくく、欠点が改善されているとしている。本試験においても、チョウセンヒメユリは花とびや欠株が多く発生し、採花率が低い傾向が認められ、「きたきらり」は栽培しにくいチョウセンヒメユリに代わる利用も可能と思われる。実際にアンケートによる意見を聴取したところ、種苗の入手・栽培が難しいヒメユリの改良種としての利用も期待できるとする意見が得られている。その一方で、葉枯病の発生が「モナ」より多い傾向が認められた。これも交配親のチョウセンヒメユリの性質に由来するものと考えられるが、チョウセンヒメユリよりは発生

が軽微であった。しかし、アジアティック系品種としては発生しやすいと思われることから、発生動向に注意し適切に防除することが重要である。

以上のように、「きたきらり」は胚培養を利用して野生種チョウセンヒメユリの小輪性を導入した新タイプのアジアティック系ユリ品種であり、従来の品種にない小さな花径を有し、花形・葉形や花房形状などの草姿に優れ、凍結貯蔵球根を利用した栽培が可能である。また、多芽性を有するため切花の収量性が高く、球根肥大が良好なため球根生産性も優れている。海外からの輸入球根による切花生産が主体となっている昨今、本品種のような独自品種によって産地の区別性が高まり、付加価値の高い特産花きとして生産振興に寄与することを期待している。

付1. 育成担当者

(1) 花・野菜技術センター

大宮 知 (1996～2002年), 筒井佐喜雄 (1996～1999年), 生方雅男 (1999～2002年)

(2) 中央農業試験場

玉掛秀人 (1994～1995年), 筒井佐喜雄 (1994～1995年), 布目暁洋 (1994～1995年), 菊地治己 (1994～1995年)

引用文献

- 1) 平田良樹, 國重正昭. “花きの育種に関する研究, A ユリの種間交雑育種に関する研究, ①スカシユリとヒメユリの間中型雑種ユリの育成に関する試験”. 野菜試久留米支場研究年報. **3**, 85-87(1978).
- 2) 北海道農業協同組合中央会 ホクレン農業協同組合連合会編. “北海道フラワーガイド”. 2003. 126p.
- 3) 小泉昌広. “オリジナルな新品種によるオリジナルなユリ産地形成を目指す 富山県育成のユリ新品種”. 今月の農業. **2**, 98-102(2000).
- 4) 國重正昭. “花専科 育種と栽培 ユリ”. 誠文堂新光社, 1993. 261p.
- 5) 岡田昌久, 野町敦志, 松本満夫. “中小輪系アジアティックハイブリッドユリ品種 ‘ゆうこの輝き’, ‘ゆうこのときめき’ の育成”. 高知県農業技術センター研究報告. **10**, 33-38(2001).
- 6) 岡崎桂一, 川田穰一, 國重正昭, 村上欣治. “花柱切断受粉法と胚培養を用いた交雑によるアジアティックハイブリッドへのヒメユリ形質の導入”. 園学雑. **63**(4), 825-833(1995).
- 7) 清水基夫. “日本のユリ 原種とその園芸種”. 誠文堂新光社, 1987. 182p.



写真1 左から「モナ」, 「きたきらり」, チョウセンヒメユリの花形



写真2 「きたきらり」の花茎



写真3 「きたきらり」の草姿



写真4 「きたきらり」を使った
フラワーアレンジメント

A New Small-flowered Asiatic Hybrid Lily Variety “Kitakirari”

Tomo OMIYA^{*1}, Hideto TAMAGAKE^{*2}, Sakio TSUTSUI^{*3},
Harumi KIKUCHI^{*2}, Masao UBUKATA^{*1} and Akihiro NUNOME^{*4}

Summary

A new cultivar of the Asiatic hybrid lily ‘Kitakirari’ was released by Hokkaido Ornamental Plants and Vegetables Research Center and Hokkaido Central Agricultural Experiment Station. It was produced by cut-style pollination between the Asiatic hybrid lily ‘Mona’ and *Lilium concolor* var. *pulchellum*, and embryo culture. This cultivar needs about 65 days to flowering when chilled bulbs are planted in May. The flower of this cultivar is about 9 cm in diameter, and the perianth is vivid reddish-orange with small dark-brown spots. The scape height is about 80 cm, and the flowers are near-vertically attached to the stem. The raceme inflorescence is compact, and thus this cultivar may be suitable for flower arrangement in domestic uses and small bouquets. This cultivar develops about 4 scapes per bulb. The bulb size of 12 cm or more in perimeter is necessary for producing 3 flowers per scape. Bulbs 14 cm or more in perimeter produce 5 flowers per scape. ‘Kitakirari’ can be propagated very effectively by scaling. About 80% of bulbs obtained 2 years after scaling are 12 cm or more in perimeter and usable for cut flower production.

^{*1} Hokkaido Ornamental Plants and Vegetables Research Center, Takikawa, Hokkaido, 073-0026 Japan
E-mail:tomomy@agri.pref.hokkaido.jp

^{*2} Hokkaido Central Agricultural Experiment Station, Naganuma, Hokkaido, 069-1395 Japan

^{*3} ibid. (Present; Hokkaido Plant Genetic Resources Center, Takikawa, Hokkaido, 073-0013 Japan)

^{*4} ibid. (Present; Hokkaido Naka-shiribeshi Agricultural Extension Center, Kutchan, Hokkaido, 044-0083 Japan)